

茨城県初記録ならびに太平洋側北限記録の クサヤモロ *Decapterus macarellus*

大森健策・外山太一郎

Northernmost record of Mackerel scad, *Decapterus macarellus*, of the Pacific side of Japan

Kensaku OOMORI, Taichiro TOYAMA

キーワード：アジ科，暖水性魚類，くさや

はじめに

茨城県海域は親潮と黒潮が交錯し、潮目を形成する特異的な海域で、その生物相は亜寒帯性から温帯・亜熱帯性まで多種多様であり、生物地理学上注目すべき海域となっている（舟橋 1998）。これまでに本県沿岸における魚類相はいくつか報告されており（浅野ら 1955, 堀 1996, 舟橋 1998, 茨城の海産動物研究会 2001, 2004, 2007）、茨城の海産動物研究会（2007）では計 531 種が記録されている。

2020 年 7 月 24 日、茨城県ひたちなか市阿字ヶ浦町地先にて、クサヤモロ *Decapterus macarellus* (Cuvier, 1833) が 1 個体得られた。本種はスズキ目 Perciformes アジ科 Carangidae に属する海水魚で（瀬能 2013）、その名のおり伊豆諸島や伊豆半島などで作られる「くさや」の原料として利用される（野田 2005）。本種は全世界の温・熱帯域に広く分布し、日本では、青森県津軽海峡、秋田県から山口県にかけての日本海沿岸、相模湾から九州南岸・屋久島の太平洋沿岸、伊豆-小笠原諸島、鹿児島県笠沙、琉球列島、南大東島など、黒潮および対馬・津軽暖流等の暖水の影響を受ける地域で確認されている（河野ら 2014, 池田・中坊 2015）。本個体は茨城県沿岸におけるクサヤモロの初記録となるため、標本に基づきここに報告する。

材料と方法

標本は、10%ホルマリン溶液で固定し、水洗したのちに 70%エタノール中に保存した。鰭条や鱗の計数、各部の計測方法は Kimura et al. (2013) に従った。計測は固定後にデジタルノギスを用いて 0.1 mm 単位で行い、計測値は標準体長または頭長に対する百分率で示した。対鰭の条数および鱗数は左体側、鰓耙数は右体側について計数した。本報告に用いた標本は、ミュージアムパーク茨城県自然博物館の標本資料 (INM-1-82922) として登録・保管した。

記 載

Decapterus macarellus (Cuvier, 1833)

クサヤモロ (図 1)

標本：INM-1-82922, 1 個体, 標準体長 207.1 mm, 頭長 54.1 mm, 尾叉長 223.6 mm, 茨城県ひたちなか市阿字ヶ浦町地先, 釣り, 2020 年 7 月 24 日, 海老沢良忠.

計数形質：背鰭鰭条数 VIII-I, 32；臀鰭鰭条数 II-I, 28；胸鰭鰭条数 21；腹鰭鰭条数 I, 5；鰓耙数 10 + 39 = 49；側線曲走部における円鱗数 67；側線直走部における円鱗数 36；側線直走部における稜鱗数 33.

計測形質のうち標準体長に対する割合 (%)：頭長



図1 ホルマリン固定後のクサヤモロ標本 (INM-1-82922, 標準体長 207.1 mm, 撮影: 外山太郎)

26.1; 背鰭前長 36.0; 第1背鰭基底長 15.7; 第2背鰭基底長 36.3; 臀鰭基底長 30.9; 吻端から胸鰭起部までの距離 26.8; 吻端から腹鰭起部までの距離 29.1; 吻端から臀鰭起部までの距離 61.1; 腹鰭起部から臀鰭起部までの距離 32.9; 吻端から肛門までの距離 53.9; 尾柄長 11.3; 体高 19.2; 尾柄高 3.2; 胸鰭長 16.1; 腹鰭長 9.7; 第1背鰭第2棘長 10.9; 臀鰭第1棘長 4.4.

計測形質のうち頭長に対する割合(%): 吻長 34.9; 上顎長 31.3; 眼径 18.8; 眼後長 46.2; 眼隔域幅 28.7.

体は細長く、紡錘形を呈し、断面は円に近い楕円形。体高は低い。吻は尖り、下顎は上顎の先端をわずかに越える。上顎後端は眼の前縁直下に達しない。眼は体側正中線よりもやや上方に位置し、発達した脂脰に覆われる。両顎に歯はない。肩帯前縁の上下に2個の突起がある。第1背鰭は第2背鰭よりも高い。第1背鰭起部は胸鰭上縁の中央部直上のやや後方に位置する。第2背鰭起部は体の中央よりもやや後方に位置する。臀鰭起部は第2背鰭第4軟条直下に位置する。臀鰭第3棘起部は第2背鰭第7軟条直下に位置する。臀鰭前部の2棘は強く、第3棘から離れて位置する。背鰭および臀鰭の最後部1本ずつの軟条が小離鰭を形成し、尾柄部の背側と腹側に位置する。尾鰭は二叉型で、後縁は湾入する。胸鰭基底上端は主鰓蓋骨後端の直後に

位置する。胸鰭先端は尖り、第1背鰭第5棘直下を越えるが第6棘直下は越えない。胸鰭長は頭長より短い。腹鰭起部は胸鰭基底下端の直下に位置する。肛門は前後方向に長い裂孔状を呈し、臀鰭起部前方に位置する。側線は完全で、主鰓蓋骨上端直後から始まり、第1背鰭基底後端直下から緩やかに下降し、第2背鰭第11軟条直下付近で体側正中線に達し、尾鰭上まで直線的に走る。稜鱗は側線直走部の後半部を占める。背鰭前方の鱗域は瞳孔の前縁を越える。

ホルマリン固定後70%エタノール保存時の体色: 頭部から尾柄にいたる背側から体側正中線にかけて暗褐色、体側正中線からやや下方にかけて褐色、腹側は白色。両背鰭、背側小離鰭および尾鰭は褐色。腹鰭、臀鰭および腹側小離鰭は淡褐色あるいは乳白色。口床の前半部は黒色だが、後半部は淡色(図2)。鰓蓋後縁上部に三日月型の黒斑がある。

備考: 本標本は眼が発達した脂脰に覆われること、肩帯前縁の上下に2個の突起があること、背鰭および臀鰭にそれぞれ1小離鰭があること、強い臀鰭離鰭があること、側線直走部に稜鱗があることなどが、Gushiken (1983) や Smith-Vaniz (1999) が示したムロアジ属 *Decapterus* の特徴に一致する。また、本標本は吻が尖ること、上顎後端が眼の前縁直下に達しないこと、両顎に歯がないこと、口床の前半部は黒色だが後



図2 ホルマリン固定後におけるクサヤモロ標本の口床 (INM-1-82922, 標準体長 207.1 mm, 撮影: 外山太郎)

半部は淡色であること、鰓耙数が 49 であること、背鰭前方の鱗域が瞳孔の前縁を越えること、胸鰭長が頭長より短いこと、稜鱗数が 33 で、側線直走部の後半部を占めることなどが、Gushiken (1983) や瀬能 (2013) が示したクサヤモロ *D. macarellus* の特徴に一致したことから、本種に同定された。

これまで、茨城県沿岸における本種の報告はなく、今回が初の記録となる。また、本州太平洋沿岸における本種の分布の北限は相模湾として知られており (池田・中坊 2015)、今回の記録は本州太平洋沿岸における北限記録である。なお、本邦における北限記録は津軽海峡に位置する青森県下北半島沿岸である (野村・塩垣 1998)。

謝 辞

標本をご提供していただいた茨城県水産試験場の海老沢良忠氏、標本の登録を行っていただいた茨城県自然博物館の中畠政明氏、文献を提供していただいた高橋夢加氏に厚くお礼を申し上げます。

文 献

浅野長雄・原田和民・藤本 武・丹下 孚 (1955) 茨城県海産動物相に関する研究 - II 魚類について. 茨城県水産試験場試験報告; 昭和 27 年度: 87-97.

舟橋正隆 (1998) 茨城県沿岸の魚類相. 茨城県自然博物館研究報告; 1: 75-96.

Gushiken, S. (1983) Revision of the carangid fishes of Japan. *Galaxea*; 2: 135-264.

堀 義彦 (1996) 茨城県沿岸の魚類・頭足類相及び主要漁獲種類について. 茨城県水産試験場研究報告; 34: 1-52.

茨城の海産動物研究会 (2001) 鹿島灘の魚類. 茨城県自然博物館第 2 次総合調査報告書: 397-416.

茨城の海産動物研究会 (2004) 茨城県北沿岸域を中心とした魚類. 茨城県自然博物館第 3 次総合調査報告書: 429-449.

茨城の海産動物研究会 (2007) 久慈川河口沖合を中心とした魚類. 茨城県自然博物館第 4 次総合調査報告書: 409-430.

池田博美・中坊徹次 (2015) クサヤモロ. p. 402. 南日本太平洋沿岸の魚類. 東海大学出版部, 秦野. 河野光久・三宅博哉・星野 昇・伊藤欣吾・山中智之・甲本亮太・忠鉢孝明・安澤 弥・池田 怜・大慶 則之・木下仁徳・児玉晃治・手賀太郎・山崎 淳・森 俊郎・長濱達章・大谷徹也・山田英明・村山達朗・安藤朗彦・甲斐修也・土井啓行・杉山秀樹・飯田新二・船木信一 (2014) 日本海産魚類目録. 山口県水産研究センター研究報告; 11: 1-30.

Kimura S., K. Katahira and K. Kuriwa. (2013) The red-fin *Decapterus* group (Perciformes: Carangidae) with the description of a new species, *Decapterus smithvanizi*. *Ichthyol. Res.*; 60: 363-379.

野田誠司 (2005) くさや. 福田 裕・山澤正勝・岡崎 恵美子 (監), pp. 47-50. 全国水産加工品総覧. 光琳, 東京.

野村義勝・塩垣 優 (1992) 下北半島牛滝産魚類目録補訂 - I. 青森県水産増殖センター研究報告; 7: 1-7, pls. 1-7.

瀬能 宏 (2013) アジ科. 中坊徹次 (編). 日本産魚

類検索 全種の同定, 第三版. pp. 878-899, 1991
-1995, 東海大学出版会.

Smith-Vaniz W. F. (1999) Carangidae. In K. E. Carpenter
and V. H. Niem (eds.) FAO species identification guide
for fishery purposes. The living marine resources of
the Western Central Pacific. Vol. 4. Bony fishes part 2
(Mugilidae to Carangidae). pp. 2659-2756, FAO.